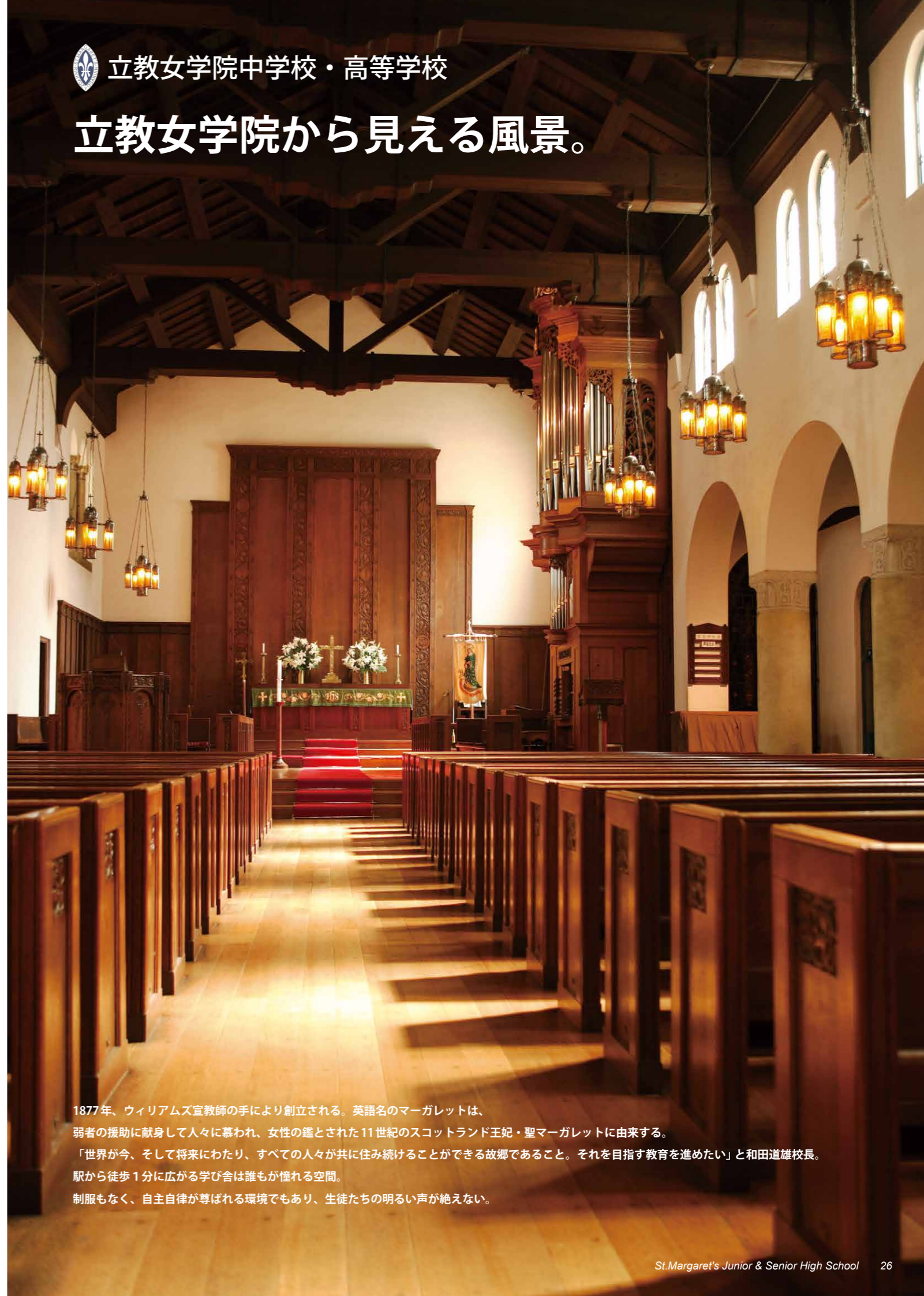


立教女学院から見える風景。



1877年、ウィリアムズ宣教師の手により創立される。英語名のマーガレットは、弱者の援助に献身して人々に慕われ、女性の鑑とされた11世紀のスコットランド王妃・聖マーガレットに由来する。「世界が今、そして将来にわたり、すべての人々が共に住み続けることができる故郷であること。それを目指す教育を進めたい」と和田道雄校長。駅から徒歩1分に広がる学び舎は誰もが憧れる空間。制服もなく、自主自律が尊ばれる環境でもあり、生徒たちの明るい声が絶えない。



校門をくぐり、木立を抜けていくと、校舎の方から歌声が聞こえてきた。「もうすぐ合唱交歓会なんです。その練習があつて」と峯村穂歌さん(中2)。すると吉松美南子さん(高2)が「みんな泣いたりしてるの?」(笑)「いや、ウチのクラスは奇跡的にもめ事がなくて(笑)」

帰国生二人の会話について、入試広報担当の高嶺京子先生から解説があった。「生徒たちは、学校生活に積極的に真剣にかかわろうとします。なぜなら、日常で起こっていることに必ず自分がかかわっている、自分たち次第で良くもなり悪くもなるんだという感覚を常に持っている。自分がきちんと向き合えば実感はあるし、手を抜くと絶対につまらないものになると知っているんです」

そう。だから、立教女学院の生徒はよく笑い、よく泣く。そして、よく話し合う。

「最初は自分の持っているものを出せない子もいました。私自身もそう。すごく内向的な性格で。母が、私がこんなになっちゃって、こんなに誰とでも話せるようになって、すごく驚いているんですよ。立教に入ったおかげだねって。自分の意思を持った友達や先輩方が多いので、その影響は大きい。すごいな、カッコイイな、自分もそうなりたいな、と。それに、自分でがんばろうと思えたら、応えてくれるプログラムがあります。立教女学院は自分が希望すれば、絶対にいるんなものが得られる機会を数多く提供してくれる学校」と吉松さん。彼女自身は「変わりたい」と強く願い、カ



リフォルニア大学デービス校への短期留学やエンパワーメントプログラムに参加して、大きな自信を得たという。そして、先日行われた生徒会役員選挙にも立候補。昔の私だったら、考えられなかった」と笑う。高嶺先生によると、帰国生の中には生徒会役員で活躍している生徒も多いという。「立候補者が多くて激戦になりますから、生徒会役員は一目置かれる存在だということです。そして、周りの人たちの特長を素直に認められる、受け入れられる生徒たちは本校の誇りであり、伝統だと思います」

立教女学院の帰国生入試の歴史は古く二十数年前から実施されている。「クラスには内部



生、外部生、帰国生がいて、みんな違う環境で過ごしてきたから、いろいろな話が聞けたり、考え方が違っていたり面白いです」と峯村さん。英語力保持のため週に1回、放課後にネイティブによる習熟度別の授業が行われるなどサポート体制も万全だ。

「周りの友達を見ていると、思いもよらなかった道に進んでいる子も多い。それはいろんなきっかけがもたらしたからだと思います。土曜集会や礼拝、A R E (Ask Research Express) 学習。いろいろな分野の方からお話を聞いたり、自分で調べたり。興味や関心、視野、いろいろ広がりましたね。だからこそ、自分に対しても深く向き合うことができたんだと思います」と吉松さん。世界の大きさを知り、自分の可能性に気づく。その先に描く未来は何だろうか。「今はグローバル社会。グローバルな人って、ただ海外に行くとかではなく、自分の持つ本質で仕事ができる人のことだと思います」。聖マーガレットの遺伝子を受け継ぐ彼女たちの目の前には、とてつもなく広い世界が待っている。

